



Title	竹ヶ原幸朗さんのこと
Author(s)	小川, 正人
Citation	教育史・比較教育論考, 19, 22-32
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39487
Type	bulletin (article)
File Information	019-003.pdf



[Instructions for use](#)

竹ヶ原幸朗さんのこと

小川 正 人

竹ヶ原幸朗(たけがはら ゆきお)

1948年生まれ。国学院大学文学部史学科を卒業後、東京都立大学人文学部教育学教室の研究生として小沢有作のもとで学ぶ。その後札幌市職員となり、同市教育委員会に配属され札幌市文化会館の設立に携わり、その後伏古児童館、市立中央図書館等の勤務をへて市民局に異動、女性センター開設などの事業に携わる。この間、1985年から北海道教育大学札幌分校非常勤講師として「日本教育史」の講義を担当。1991年5月に市職員を退職し新札幌市史編集委員となる。同時に、北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程に進学。1997年4月から四国学院大学文学部教授。

都立大学在学中からアイヌ教育（史）に関する研究に取り組み、以後、長年にわたりこの分野における唯一の研究者、かつ第一人者として、近現代アイヌ教育史の通史像の構築、教科書記述や青少年のアイヌ観などの実践的な研究課題などを通して、研究の基盤と視野を切り拓き続けるとともに、『北海道用尋常小学読本』の研究や北海道教育会機関誌の復刻事業など、近代北海道教育史研究にも大きな基礎的蓄積を築いた。

2008年3月25日、竹ヶ原幸朗さんが亡くなられた。

改めて説明するまでもなく、アイヌ教育（史）研究を自身の研究の中心に据え、今日に続く通史像を構築し、幾つもの重要な主題を深め、何より、研究の基盤を築き続けた人だった。基礎的な仕事と実践的な課題の両方を意識し、かつ、それぞれに妥協することのない仕事を重ねつつあった人だと思う。まだ還暦の前だった。竹ヶ原さんのことを過去形で語ることになるなんて、いくら何でも、早すぎる。

竹ヶ原さんは、僕にとっても、アイヌ教育史研究の唯一の先達だった。でももう、竹ヶ原さんと“今”や“次”の議論をすることができない。これまでの竹ヶ原さんの仕事から汲み取ることを続けることで、自分の中での議論を重ねるようにしておきたい。この文章はそのために書いたものを下敷きになっているが、僕にとってだけではなく、研究室にも、教育史研究にも共有されるべきことでもあると思う。

別紙に、竹ヶ原さんの著作などを目録としてまとめた。目録の「1 著作」をざっと通覧しただけでも、まず近代アイヌ教育史の通史を著すとともに文献目録などの整備を進め、並行して近代北海道教育史への問題提起を含んだ北海道用尋常小学読本などの研究を開始し、やがて個別の主題を深める研究に着手していった——という足跡が窺える。1990年代から事（辞）典類の執筆が目立つ。

それらは、こうした竹ヶ原さん自身の研究の積み重ねが、アイヌ教育史・北海道教育史の位置や意義を学界に認識せしめたことを示すものだろう。竹ヶ原さんは、まさに自ら道を切り拓いたのだ。

以下に、竹ヶ原さんの主な仕事と、そこから考えさせられることを記しておきたい。

なお、文中に挙げた竹ヶ原さんの論文等については、ここでは表題と刊行年のみを記した。詳細は目録によられたい。また、文中では竹ヶ原幸朗さんのことは全て「竹ヶ原さん」と記した。若年の僕がこう書くのは失礼なことと承知しているけれども、ずっと、こう呼びかけてきた。非礼を畏れつつ、ここでは、このまま使わせてもらいたい。

* * *

1 近代アイヌ教育史研究

1-1 通史像の構築

1-1-1 それまで高倉新一郎「旧土人教育」(『北海道教育史 全道編3』北海道教育研究所編、1963年)が通史叙述の水準だった中で、竹ヶ原さんが、「アイヌ「教育」政策史研究ノート」(1976年)や「アイヌ教育史」(1976年)を著し、直近の『現代教育史事典』所収「アイヌ教育」(2001年)まで、近代アイヌ教育史の通史を著し続けてきたことは、近代アイヌ教育史研究の水準を引き上げ、またそこから幾つもの論点を導き出すものだった。竹ヶ原さんの仕事の基軸がここにあったことの意義は大きい。

竹ヶ原さんがこのテーマに取り組んで、特に初期のころは、先行研究はもとより、資料そのものが乏しく¹、しかも行政・教員側の記録資料が圧倒的だという制約が、大きな困難となっていたろうと推察する。そのような中で書かれたであろう「アイヌ教育史」は、その構成だけを高倉「旧土人教育」²と比べてみると、大枠では共通する項目や組み立てが見られるものの、構成の細目や叙述の内容を見れば「和人教師の実践」や教育内容の問題点の析出などに関心を傾注し、単に個々の事象を「反教育の営み」として批判する³ことにとどまらない、通史像の書き換えを目指す姿勢を感じる。

その後、教育行政担当者の「思想」(岩谷英太郎)、教員の実践と意識(吉田巖)などの研究発表を行い、それらは「近代日本のアイヌ教育」(1983年)に盛り込まれている。個別のテーマを深めつつ、その成果が通史叙述の増補・改訂に反映されていく、という研究の着実な積み上げが、そこにある。1990年頃から行ってきた、1880年代のアイヌ教育政策と教育実践の再検討(具体的には札幌県による師範学校教員遠藤正明の平取学校派遣に焦点を当て、遠藤による教授方法研究の内容や県の施策の意味の検討に及んでいる)や「北海道旧土人保護法」の起草者と目される内務官僚・白仁武に関する調査(これは、「北海道旧土人教育会」に関する研究の拡がりとともに深まっていったテーマだという点にも意味がある)、1920年代のアイヌの運動の中でも水平運動との連関や近文アイヌ給与予定地問題という背景などから竹ヶ原さんが特に注目していた「解平社」の活動とその

意義などの研究の成果は、1991年の「近代日本のアイヌ「同化」政策」にも盛り込まれている。『現代教育史事典』の項目として書かれた「アイヌ教育」（2001年）は、限られた紙幅の中に、それまでの竹ヶ原さんの成果が盛り込まれているのみならず、従来はまとまって整理されたことのなかった敗戦後のアイヌ教育史を含めた、近現代を通した通史を展望していることも重要だと思う。

1-1-2 竹ヶ原さんが先ず通史叙述に取り組んできたことについては、それが研究の基盤を築く重要な仕事だったことは勿論だが、研究を積み上げ始めた当時の状況を推察することで、その意義はいっそう重みを持つてくる。

例えば、竹ヶ原さんが著作を公刊し始めた頃は、アイヌの歴史そのものを研究分野と認定するかどうか、アイヌを「アイヌ」と呼ぶのかどうか、ということが問題になっていたはずだ。もちろん、研究の対象や課題はいつだって自明ではないし、アイヌ史研究の基盤は現在もなお脆弱だから、この問題は単なる過去の話ではない。けれども、例えば「近代日本のアイヌ教育」（1983年）の冒頭に「今日、アイヌ研究は、日本の歴史、文化の構造を解明するうえで不可欠な領域として、それ自体が確固としたひとつの学問領域を形成し、いわゆる「アイヌ学」というとらえかたさえされているのである」（454ページ）と記されている⁴ ことについて、初めて読んだときには、なぜこんなことをわざわざ書くのだろうと思っていたが、アイヌを対象とした歴史研究の必要性そのものをさまざまに主張せねばならなかった学問の環境を思うべきなのだとは今は考えている⁵。

また、その頃のアイヌに関する論考の執筆の機会があっても、そこでは、概説ないしは時論が求められがちだったのではないとも思う。竹ヶ原さんにとって、具体的なテーマを深める機会は、かなり意識的に求めなければ獲得できなかったのではないだろうか。竹ヶ原さんの1980年前後の精力的な学会発表については、そういう背景を意識してみるべきものだと思う。そればかりでなく、こうした社会的な要請から単に距離を置くわけもなく、しかし妥協することもなく、個別研究の蓄積と通史像の執筆を続けてきたことが、やがてその成果が社会に流通する—北海道史・日本史の概説書や教材にも、近代アイヌ教育史の記述が、ある程度ではあるが盛り込まれていく—ことにも大きく貢献してきたと考えるべきだろう⁶。

1-2 基礎的調査の条件整備とその徹底

1-2-1 先達と言える人がいない中で研究を開始した竹ヶ原さんが、通史叙述の達成と並行して「アイヌ教育関係文献目録」の作成に取り組んだのは、仕事そのものとしては勿論、研究の基盤を整備することを率先した点で極めて重要であり、大きな功績だ。

既に幾人かによる文献リストがあったとはいえ、それらの成果を踏まえつつ、1980年に小沢有作さんとの共編による目録を編さんし公刊したことは、その内容が、主要な雑誌を悉皆調査したこと、教育実践記録を意識的に収録したこと、近代初頭から現代までを対象としていることとあまって、その後の近代アイヌ史研究を前進させる大きな基盤となった⁷。それだけに、1991年の「増補改訂版」以降のデータの追補、とりわけ、1990年代後半から竹ヶ原さんが精力的に進めていた、いわゆる地方教育会機関誌の記事調査の成果の反映などを盛り込んだ目録の編さんを、竹ヶ原さん自身も

期していただけない、まとめる時間を持てなかったことを本当に残念に思う。

1-2-2 竹ヶ原さんの歴史叙述は綿密な基礎的調査を下敷きにしている——こう書いてしまうと当たり前のことになるが、アイヌ教育史上で重要な意味を持つと考えた人物や団体を取り上げるとき、竹ヶ原さんは先ずその個人・組織についての基礎的調査を特に徹底させている。

例えば岩谷英太郎については、いったんその著作年譜（1981年）を作った上で、アイヌ教育に関する言説を主たる資料にその「思想」を論じる、という手順を経ている。民間有志者による教育事業という体裁をとった北海道旧土人教育会を論じようとして、先ず同会の主要メンバーひとりひとりの履歴、所属団体、交友関係などを洗い出そうとしてきた（その一端は1993年の日本教育学会発表でうかがえる）のは、ともすれば主唱者である小谷部全一郎をはじめとする関係者の言説などを使って論じてしまう方法とは大きく異なる⁸。

1-3 実践的な課題設定

「実践的な」という表現が適切なのかどうか心もとないが、竹ヶ原さんの仕事の特色として、「解平社」などのアイヌの活動への着目、教科書の記述など歴史的にも現在においてもシャモ（和人）のアイヌ認識の醸成・再生産の要にある媒体の分析とその継続、日本教育学会大会におけるコロキウムを開催（1980年）などを通じた「研究の現状と課題」の共同討議の場の意識的な設定などを挙げることができる。

1-3-1 すでに「アイヌ教育史」（1976年）において、とても長い注を付けて近代北海道における「アイヌ解放運動」の概説を試みているのは、当時の指導教員だった小沢有作さんの影響もあるだろうとは思いますが、従来のアイヌ教育史研究が専ら行政や教員の営為をあとづける歴史叙述になっていることに対して、どのようにしてアイヌ自身の動きや取り組みを軸にした教育史を考えることができるか、という問題意識があったと僕は考えている。僕も、竹ヶ原さんからしばしば、同時代のアイヌが見聞して元気が出るような近現代史を描きたい、というような言葉を聞いていた。現代の和人にとっても示唆に富むものはないだろうか、とも。1940年代における柳宗悦の議論に着目し、「アイヌ教育史」や「近代日本のアイヌ教育」（1983年）などの中で、通史叙述の一部をこれに割いているのも、その考えの一端を示すものだろう。

そういう意味では、教育史研究を通して「解平社」の存在に行き当たり、その意義を論じた、「解平社」の創立とアイヌ解放運動」などの論文は重要な仕事の一つになった。解平社そのものについては、竹ヶ原さんより以前にも論及はある⁹けれども、新聞・雑誌報道について悉皆的な調査を行い、主要なメンバーや関係者の経歴を調べたことを踏まえてその「創立」を論じたのは、漠然と意義を述べることの多い他の文献との質的な違いである。僕の印象に強く残っているのは、北海道ウタリ協会札幌支部の創立20年記念式典でのこのテーマによる講演だった。この種の集まりでの講演といえば、文化の復興や権利の回復に向けて直接的にその理念や方向性あるいは国際的な動向などを語るものが多いというのが僕の印象で、このときの竹ヶ原さんの講演のような、歴史の、それも

具体的な出来事について当時の新聞記事などの資料を紹介しながらの話は珍しかったと思う。だが聴講者の殆どがこの歴史の詳細を初めて知り、またその中には解平社の主要メンバーの遺族もいて、講演が終わって会場を後にする人たちから「知らなかった」「知ってよかった」という、ちょっと興奮したような口ぶりの感想をあちこちで聞いたのは、僕にとっても得難い鮮烈な経験だった。

アイヌの近現代史を取り上げる文献、とりわけ差別・人権の問題に触れた文献が解平社を紹介することが増えたのは、この竹ヶ原さんの論文の後からだとは僕は認識している。

1-3-2 青少年や学校教員のアイヌ観、それらを醸成し再生産する主要な媒体の一つである辞典や教科書の記述に関する調査と分析も、竹ヶ原さんが意欲的に取り組んだ研究テーマだった。「国語辞典（小学生用）のアイヌ像」（1977年）、「青少年のアイヌ観」（1980年）、「教科書の中の〈アイヌ民族〉」（1992年）、「『世界の先住民のための国際年』とアイヌ教育の課題」（1993年）などがそれである。また、「地理教科書のなかのアイヌ像」（1990年）、「虚構としての〈あいぬの風俗〉」（1994年、同「増補」が2008年。これが遺稿になった。）などは、近代以降の教科書におけるアイヌに関する記述の変遷とその問題点などを検討した仕事である。

教科書の記述に関する論及や児童・生徒らのアイヌ観に関する調査については1970年代から見られる¹⁰し、近年はこれらをテーマにした論文や新聞・雑誌報道も増えつつある。こうした流れの中にあって、竹ヶ原さんの仕事の意義は、ただに先駆的であることにとどまらぬ。すなわち、同時代の教科書記述については継続的な調査に取り組んでいたこと、近代以降の教科書については、教科書検定・採択制度やアイヌに関する教材の成立過程、教材に対する学校の反応などを調査していること、アイヌ教材やアイヌ関係記述について、もちろんそこに見られるアイヌ認識に対する批判的検討は行うけれども、現在の議論を指標として過去の教材を批判するだけにとどまることなく、その著者・教材がアイヌに着目したということそのものに先ず注意を払うべきことを再三述べていた点¹¹——などが重要だと考えている。

1993年3月に北海道ウタリ協会釧路支部が開催したシンポジウムで、竹ヶ原さんは当時の小学社会科教科書の記述の問題点について、ごく基本的な事実関係の誤りすら見られることなどを指摘した報告を行った。釧路市春採の釧路市生活館の2階で、支部の会員ら30人ほどを前にした報告だったが、その内容が新聞で報道されたことが契機となって、実際の教科書記述の訂正にまでつながった。竹ヶ原さんの仕事が具体的な力を持った一つの例だった¹²。

1-3-3 1980年の日本教育学会（会場は北海道大学）でコロキウム「アイヌ教育（史）研究の現状と課題」を開催したことを皮切りに、竹ヶ原さんは幾度か、アイヌ教育（史）研究の課題を論じる討議の場や講演会などを企画・運営し、あるいは世話人としてそれに加わった。そこでは必ず、小川早苗さん、貝澤正さん、北原きよ子さんといった、アイヌ教育の体験者であり親としても関わりを持ってきた人びとと、佐藤秀夫さん、久木幸男さんなどの、日本教育史の豊富な知見に基づく鋭敏な問題関心を示し続けてくれた研究者とを招き¹³、それぞれの報告やコメントを会の柱に位置付けていることも特色である。

それは、文字通り研究の現状と課題の議論を深めるといふ目的そのものによるけれども、教育（史）の学界では自ら動かない限りアイヌ教育（史）を主題に据えた議論の場はない、という現実に対する展望を求めての格闘だったろうとも思う。

2 近代北海道教育史研究

竹ヶ原さんの仕事のもう一つの大きな柱は、近代北海道教育史の研究である。近代日本における北海道の歴史的な位置を意識した視野のもと、基礎的資料の整備に大きな努力を傾注したことが特色である。近代アイヌ教育史研究と近代北海道教育史研究を、研究の対象としては意識的に区分しつつ、かつ共通する視野のもとに捉えていたこと（これも当たり前のことのようだけれども）、竹ヶ原さんの特色であり強みだと言ってよいと思う。

2-1 『北海道用尋常小学読本』への着目と分析

竹ヶ原さんは『北海道用尋常小学読本』の覆刻に携わり、解題を執筆している（1982年）が、それは、覆刻そのものが基礎的かつ重要な仕事であることは勿論、解題において「近代北海道の教育史的位置」を先ず問うことからこの読本を位置付けたことが特徴だった。

解題の冒頭で竹ヶ原さんは、当時起こりつつあった近代北海道史研究の新たな動き、すなわち「従来の北海道近代史が自己完結的な開拓史研究＝開拓史観に陥りがちな傾向を有してきたことに対して、近代の北海道を「内国植民地」として日本近代史のなかに位置づけ、新たな北海道史像の再構成を試みている」研究動向を意識し、「こうした視点にたつて近代北海道の教育をとらえなおす」ことから読本を「まさに、「内国植民地」としての近代北海道の教育の諸相を象徴するもの」と述べた。これを単なる枠組みや視点の提起にとどめることなく、近代北海道の教育制度史の俯瞰や読本の編纂過程の解明などを踏まえた上で読本の内容を検討する、という手順を踏むことによって、『北海道教育史』（北海道（立）教育研究所、1955～1970年）の記述が通説となっている中で、貴重な、そして今後の基礎となる仕事となり得たものだと思う。

竹ヶ原さん自身がこの研究を継続し、「北と南を結ぶ尋常小学読本」（1992、1993年）へと発展させたことは重要な前進だった。表題が示唆するとおり、この論文では、『北海道用尋常小学読本』と、これと同時に発行・使用された『沖縄県用尋常小学読本』とを、「両読本が同一の著作兼発行者、編纂方法、使用期間であるという事実」に着目し「統一的に把握する」ことによって「文部省の編纂意図など本質的な問題にアプローチできる」¹⁴としたこと、そのために、両読本の編纂過程を明らかにし（北海道用についても、自身の1982年の論文を含む従来の研究に対して、『北海道教育週報』の記事などの新たな資料の調査も踏まえながら、再検討を行っている）、それを踏まえて両読本の教材を対比し、「文部省の両読本の編纂意図」を検討する、という方法を採用したことが特徴である。

近年では、近代北海道史研究において（おそらく琉球・沖縄史研究においても）「北と南」という視点・枠組みを打ち出す議論はむしろ盛行している観もある¹⁵が、竹ヶ原さんのこの論文は、こ

こでもやはり、単に指摘するにとどまらず、また、大枠の時代状況を説明して北海道と沖縄を対比するような議論でもなく、編纂過程や読本の内容について、当該時期の文相井上毅の教育政策の検討なども含めた多面的な検討を重ねることを通して、「北と南」という枠組みを、与件ではなく、両読本の編纂意図や性格の検討を踏まえた結論として深めようとしていることが重要だと僕は思う

16。

2-2 北海道教育会機関誌の覆刻事業

北海道教育会の機関誌『北海道教育会雑誌』『北海道教育雑誌』『北海之教育』の覆刻は、近代北海道史・アイヌ史にとって大きな意味をもつ基礎的事業だった。覆刻版の『月報』に掲載された「編輯委員会日誌抄」によれば、覆刻のきっかけは『北海道用尋常小学読本』覆刻に際しての解題執筆の打合せの中で、竹ヶ原さんと文化評論社の担当者との間でこの雑誌のことが話題にのぼったことにあるという。

この事業の意義は、庁府県の教育会機関誌の覆刻事業そのものが稀少だということにとどまらない。竹ヶ原さんのほか、北海道教育史の研究を長年続けてきた谷内鴻さん（当時は国学院短期大学教授）、1970年代以降の新たな近代北海道史研究の展開をリードしてきた桑原真人さん（当時は北海道開拓記念館研究職員、のち札幌大学）、そして逸見勝亮さん（当時は北海道大学教育学部助教授）という、この事業に最適の4名による編集委員会を組織し、集団的かつ数年間に及ぶ取り組みを通して、各巻に凡例と目次を付けたことが、まさに基礎的と言い得る仕事になったと思う。各巻の凡例を一読すれば、底本の所在調査と状態確認、他での所蔵本との比較検討などに相当な力を注いでいることもよくわかる。『月報』を発行して研究課題・研究情報の発表の場としたことも有益な仕事だった。

2-3 札幌市史

竹ヶ原さんは1991年5月から1997年3月まで、新札幌市史の編集委員をつとめた。この間、『新札幌市史』の通説編は「3」と「4」、対象時期にすると1900年前後から敗戦までに当たる巻が刊行され、竹ヶ原さんは、その中の教育史とアイヌ史を担当した（1994年、1997年）。また、編輯委員会の機関誌『札幌の歴史』に上述の「北と南を結ぶ尋常小学読本」を執筆、機関誌の巻末に掲載される、編集委員による短いコラム的な「執筆閑話」欄にも、内務官僚・白仁武が「北海道旧土人保護法」の起草者と目されることを指摘したり（1992年）、1935年に札幌の今井呉服店にて開催された「北海道アイヌ手芸品展覧会」について言及する（1996年）などの、興味深い資料の紹介や論点の提示を行っている。

通説編に収録された竹ヶ原さん執筆のアイヌ史の叙述には、20世紀の札幌の歴史の中に初めてアイヌの存在を一定の具体性と分量で記述したこと（「札幌とアイヌ問題」（1994年）、「昭和戦前期のアイヌ民族と札幌」（1997年））、北海道旧土人教育会の円山村への学校設置計画を初めて明らかにしたこと（「札幌とアイヌ問題」の中の「幻の「北海道旧土人教育会円山学園」計画」）、など、アイヌ史研究上での重要な前進を見ることができる。

また札幌の教育史に関する叙述（「国民統合と教育」（1994年）、「教育都市札幌」の実像」（1997年））では、1997年執筆の表題が示すとおり、いわゆる発展・拡充史観に立った教育史像から距離を置く必要を意識していたこと、記述のあちこちに市内各地の学校文書の精力的な調査・収集の成果がうかがえることなどが特色だと僕は考えている。

* * *

1997年4月に四国学院大学教授に就いてからは、大学のある香川県や善通寺市、そしてご家族が札幌から移り住んだ京都市の教育史の資料も意欲的に集めていた。

札幌を離れてからの竹ヶ原さんとは、一年に一度会うかどうか、という状態だったが、その度に、善通寺の師団と教育の係わり、「一太郎やあい」の史話をめぐる調査、大阪や京都の古書店で手に入れた京都の小学校の資料の話などを何度か聞くことができた。それぞれ、単なる関心の域を超える、資料の調査と収集に着手していた。2008年2月、入院していた京都東福寺の赤十字病院を訪ねたときも、「ここ、もとは陸軍の病院でね…」という話が始まった。

また、新札幌市史のための資料収集の頃から、意識的に、近代以降の北海道の新聞・雑誌などを通覧し、アイヌ教育史・北海道教育史に関係する記事を抜き出し、ファイルやカードに整理していた。これをまとめれば、年表、それも、詳細で、出典を明示できるものが作れると思うんだよね、と展望を聞かせてもらった。1998年から科学研究費補助金（萌芽的研究：課題名「近代日本の教育界におけるアイヌ認識の態様に関する基礎的調査研究」）により、全国各都府県の教育会機関誌を中心とした教育雑誌のアイヌ関係記事を収集してもいた。

これからもっと時間があれば、竹ヶ原さんのこうした調査や地道な（しばしば見聞するこの言葉を、ここで挙げた竹ヶ原さんの仕事にこそ使いたい）作業が、さらに幾つもの仕事へと展開していったのではないだろうか。そうなっていけば、アイヌ教育史研究の、近代北海道教育研究の、一層の進捗を見ることができたはずだ。

近代アイヌ教育史の勉強を志した僕にとって、竹ヶ原さんをどうやって越えるかが、絶えず意識せねばならない課題だった。修士論文のテーマと課題設定は、そのことになしにはありえなかった。竹ヶ原さんのアイヌ教育史研究に対して、単にもっと詳しくとか、違う対象を選ぶとか、個別の問題に立ち入る、といった次元ではないところで、どう越えるか。最初の大きな壁はこれだった。有難いことに、竹ヶ原さん自身もまた「僕とおんなじようなことじゃあ、しょうがないものねえ、小川くん」と、竹ヶ原さんらしい言い方で、課題設定と方法を鍛えることを僕に求めてくれた。アイヌ教育史の個々の事象を検討する際に、そこで見えてくる具体的な制度や出来事、言辞などについて、それをすぐさま「同化」「アイヌ語・アイヌ文化の否定」と規定して検討を終えるのではなく、政策・制度・教育内容の特徴や問題点を具体的に説明していくこと——たどたどしいけれど、自分が意識すべき方法・姿勢としてこんなことを修士論文の序章に記したのは、近代日本のアイヌ教育を「同化教育」と規定し叙述してきた竹ヶ原さんに対して、その規定には同意しつつ、なお分析と

叙述を少しでも深めていくための、僕なりの姿勢の表明だった。そして僕はやっと書き始めることができたのだった。

竹ヶ原さんに促され、或いは敢えて竹ヶ原さんに抗しようとするのが、僕にとっては自分の仕事や考えを進めるための重要な契機となった。例えば、1991年に開催された北海道歴史研究者協議会のシンポジウムで、竹ヶ原さんは、自ら学校を設置したアイヌの例について、僕に発言の機会を与えてくださった。皆の前で自分の調べた結果と考えていることを言葉にして、皆の反応を実感することで、僕は自分が公刊した最初の論文について、僕なりの意義を感じる事ができた。或いは、札幌県による平取学校の設置と師範学校教員遠藤正明の派遣に関する竹ヶ原さんの仕事について、竹ヶ原さん自身の着想や実際の論文を間近で見聞し、それに“対抗”しようとしたことが、自著『近代アイヌ教育制度史研究』における「初期アイヌ学校」と1880年代のアイヌ教育政策の特徴の議論につながった。そうしたいくつもの壁を設定してもらってきたことを、本当に、有難く思う。

北海道ウタリ協会の佐藤幸雄事務局次長（当時）や東京国立博物館（当時）の佐々木利和さんらとは、竹ヶ原さんの紹介で面識を得た。竹ヶ原さんが自ら企画して、北大教育学部会議室で「アイヌ学入門」という講演会を開催したこともある。1985年頃から5年ほどの間、北海道大学教育学部の410室を使って、隔週から月1回ぐらいのペースで勉強会を開いていた。竹ヶ原さんは当時市役所に勤めていて、勤務が終わってから大学に来てくれて、夜7時ごろから開始、最初は『北海道旧土人保護沿革史』（喜多章明著、北海道庁、1934年）を読み、その後は各人がそれぞれの研究計画や行事参加報告などを行いながら、情報の交換ということにもそれとして大きな意味を見いだそうとする集まりだった。僕が初めて学会発表したのは1987年3月の北海道歴史研究者協議会の例会で、それは竹ヶ原さんの斡旋によるものであり、当日のコメンテーターは竹ヶ原さんがつとめてくださった。僕が北海道歴史研究者協議会や北海道大学文学部日本史研究室の人たちと面識を持てたのは、このおかげだった——月並みな言い方だが、竹ヶ原さんがいたことで僕が獲得できた経験や知友、情報がたくさんあった。

本当に、ありきたりな言い方しかできなくてもどかしいけれども、僕の仕事の現在——まだこんな程度でしかないのだが——は、竹ヶ原さんなしにはあり得なかった。

竹ヶ原さんが大学院での勉強を志したときに、北海道大学大学院教育学研究科の博士課程を選んでくれたのは、教育史・比較教育研究室にとって“名誉”なことであり、得難い財産になったと思う。手前味噌になることを敢えて書いておきたい。竹ヶ原さんが来て、僕と、廣瀬健一郎さんが在籍したときの研究室は、アイヌ教育史研究の最前線だった。北海道大学として、安易に取り組むことはできないが、しかし挑まなければならないテーマであるだけに、それはとても大切なことだったはずだ。

アイヌ教育史研究を、研究として自立させたのは竹ヶ原さんであり、アイヌ教育史研究と北海道教育史研究のそれぞれを、そこに自足することのない視野や課題を設定することで進めてきた人だった。

僕が書くとは遜な言い方になるかもしれないが、叙述の平易さも特長だった。竹ヶ原さんの論文は、一般の辞典にもないような難解な熟語には頼っていないし、一つ一つの文も、基本的には短く区切られた読みやすいものになっていると思う。特に「いまどきの子どもたちへ」などは、書き上げたものをご家族に見てもらって、わかりやすい文章へと推敲していたと聞く。基礎的であり、かつ実践的であることは、研究の課題設定ばかりでなく、叙述の姿勢にも一貫していた、と僕は考えている。

20年近く前になるが、竹ヶ原さんに連れられて小沢有作さんの家を訪れる機会があった。そのとき小沢さんは、「「アイヌ教育史」のほうは進んでいるのか」と問うていた。単著をまとめる具体的な構想があったのだらうと思う。学位論文も未完のままだったけれど、近現代アイヌ教育（史）研究を基軸とする竹ヶ原さんの仕事の成果とそこに至る足跡は、もっともっと、これからの学界に問うていく意義と必要があると思う。

(2009.3.14)

¹ 若干の指標を挙げれば、『アイヌ文献目録 和文編』（みやま書房）の刊行が1978年、アイヌ学校教員・吉田巖の日記を帯広市図書館が公刊を開始するのが1979年、多くの聞き書きを収録した『エカシとフチ』（札幌テレビ放送）の出版は1983年、北海道立文書館の開設は1985年である。

² 高倉「旧土人教育」の主な構成は次のとおり。

第一章 学制前の旧土人教育／第二章 旧土人教育の創始と保護政策（第一節 開拓使仮学校における旧土人教育／第二節 旧土人児童に対する小学校教育の開始と対雁学校の経営／第三節 北海道旧土人教育資金の設定および色丹教育所の経営／第四節 外国伝道師の旧土人教育）／第三章 北海道旧土人保護法の成立と旧土人教育の普及（第一節 北海道旧土人保護法の成立／第二節 アイヌ学校の設立／第三節 北海道旧土人教育会の教育事業／第四節 旧土人児童教育規程の制定／第五節 アイヌ教育の実績／第六節 アイヌ教育の終焉）

³ 「アイヌ「教育」政策史研究ノート」（1976年：本文末尾の記載によれば脱稿は1975年10月）が、表題にも見えるとおり、アイヌに対する「教育」はカッコで括って表現していたのも、このような認識を示すものだったと思う。

⁴ 「アイヌ研究」の意義は先ずアイヌの歴史・文化そのものにとって検証されるべきことであって、「日本の歴史、文化の構造を解明するうえで不可欠」であることに求められるものではないが、現在でもなお、あるいはむしろ、日本社会におけるアイヌ研究、アイヌ文化の「意義」はしばしばこのように説明されることがある。もちろん、竹ヶ原さんは、上記の言葉に続けて、しかし日本のアイヌ研究も西欧の人類学・民族学と同様に植民地主義的性格を帯びていたことを明記している。

⁵ 現在はむしろ、「アイヌ民族に触れないわけにはいかない」的な前置きでアイヌに言及することが可能になってしまっているだけに、「触れないわけにはいかない」と言い得るまでになった研究の積み上げを

意識し、記述することが自明となることの陥穽を考えるべきだと思う。

⁶ 同時に、海保嶺夫、海保洋子らの著作が刊行されるなど、1970年代後半から1980年代前半にかけての進捗は大きかったと思う。

⁷ この目録の意義については、久木幸男さんによる書評（『教育学研究』第58巻第2号、1991年6月、のち『続 教育史の窓から』第一法規、1995年に再録）が丁寧に紹介して下さった。

⁸ それだけに、この研究の成果が、『新札幌市史 第3巻通説3』の「札幌とアイヌ問題」（1994年）の中で同会の札幌円山への実業補習学校設置計画を中心に紹介されたことにとどまるのは、やはりとても残念なことだ。それでも、著作目録に掲載した目次から、この叙述の背後に竹々原さんによる多年の調査の蓄積があることは十分うかがえると思う。

⁹ このことについては、竹々原さん自身が「「解平社」の創立と近文アイヌ給与予定地問題」（1998年）で整理している。

¹⁰ 例えば「子どもたちのなかの「アイヌ」「教育・教師のなかの「アイヌ」（井上司編著『教育のなかのアイヌ民族 ―その現状と教育実践―』あゆみ出版、1981年）に収録された調査などがある。

¹¹ 例えば「宇野浩二の児童文学とアイヌ」（1989年）は、小説家・宇野浩二の児童文学「露の下の神様」（1921年）、「春を告げる鳥」（1926年）などのアイヌを取り上げた作品について、1920年代という時代において、「被抑圧民族・民衆への関心」の一環として「アイヌを視野におさめ」、社会に提供したことの意味に着目すべきことを述べている。

¹² もっとも、この教科書記述については、竹々原さんはこのシンポジウムの以前から指摘し続けていたことであり（例えば1992年9月の自由学校「遊」での講義など）、新聞社が記事することでようやく事態が動いたという問題も銘記されねばならない。

¹³ 竹々原さんの仕事が、こうした人たちが関心と期待とを寄せるものであったことも、ここから窺えると思う。

¹⁴ 「北と南をむすぶ尋常小学読本（上）」22ページ。両読本の「比較研究」については、これより先に桑原真人さんが提起している（『北海道用尋常小学読本』について ―『沖縄県用尋常小学読本』との対比において―）『北海道開拓記念館調査報告』第9号、1975年ほか）ことで、竹々原さんも「この点、桑原氏の先見性は高く評価されてよい」と述べている。

¹⁵ 具体的な事例は枚挙に暇がないが、竹々原さんも執筆した『琉球新報』の連載「日本文化を考える 北と南からの視点」（1991年）などもそのごく一例である。

¹⁶ それだけに、竹々原さん自身が、この論文について、なお検討が不十分であるとしている（「北と南を結ぶ尋常小学読本（下）」35ページ）ことも付記しておきたい。「両読本は日清戦争に始まって日露戦争で終わったのである」（同）と述べたその歴史について、竹々原さんはなお、書き遺したこと、調べ遺したことがあると強く意識していたはずだと思う。